

大海に挑みつつ地域の発展に情熱を傾けた男

# 高田屋嘉兵衛

1769—1827

宮本 義憲



高田屋嘉兵衛像(函館市宝来町)

「商人というのは利を追うものでありながら、我欲ではそれができない、我欲のつよい人間はずで、そのために盲目になっている、耳も欲で聾している、だから利という海で泳ぎながら自分自身の利についてにぶい人間でなければならぬ」これは司馬遼太郎の長編「菜の花の沖」(1998)の中で、高田屋嘉兵衛が兵庫に出て奉公した廻船問屋の主人、堺屋喜兵衛の言葉として出てくる一節である。実像嘉兵衛もこの利と欲の違いを理解し実践した人といわれる。また司馬遼太郎は後にこう述べている。「人の偉さは測りにくいものですが、その尺度を英知と良心と勇氣と

いうことにしましょうか。では江戸時代を通じてだれがいちばん偉かったでしょうか。学者、大名、医者、発明家、いろいろ出ました。私は高田屋嘉兵衛だろつと思えます。それも二番目が思いつかないくらいに偉い人だと思っています」(洲本市での講演より「1985」)

高田屋嘉兵衛は、明和6年「1769」淡路島の西海岸播磨灘に面した都志(現洲本市五色町都志)に6人兄弟の長兄として生まれる。遠祖は越後高田の出といわれ、それで高田姓を名乗ったとの一説がある。13歳の頃から地元の親戚筋に奉公し、漁業に従事したり、商売の手伝いもした。22歳のときに兵庫に渡り、前述の堺屋喜兵衛のところまで樽廻船(灘の酒を江戸へ運ぶ船)の水主(船乗り)となる。「海の男」高田屋嘉兵衛の始まりである。

沖船頭(雇われ船頭)に出世した後の寛政8年「1796」28歳にしてついに船持船頭として独立する。そして当時としては超大型船である1500石積の辰悦丸で箱館に来て交易を開始する。2年後には箱館大町に支店を開設し、弟金兵衛を支配人として置く。

蝦夷地の産物を買入れ、手船5艘をもって兵庫・大坂・下関に売捌き、そして諸国の物産を箱館に下ろして捌くという輸送体系をつくり上げていった。当時の北海道は江差・松前・箱館が本州との交易港であったが、嘉兵衛は今後の蝦夷地開発において発展の可能性の大きい箱館に着眼し進出した。寛政11年「1799」幕府は北方開発のため箱館から知床に至る東蝦夷地を直轄としたが、嘉兵衛はこの年択捉航路確立という偉業を成し遂げる。